
狙われた月影! 百鬼妖譚

柚木夏莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狙われた月影—百鬼妖譚

【NZコード】

N7717Y

【作者名】

柚木夏莉

【あらすじ】

弟の命を助けるため、湊は鬼の肝を探していた。

一方、鬼の氷上は、純血種の鬼としての大事な成人前の儀式を控えていたが、巡り合う筈のない種族二人が月光の下で出逢い始まる物語。

(他サイトでもシリーズ物で載せております。)

湊と氷上

暗く光をおとされた部屋の扉が、荒々しい足音に続いて突然開かれた。

響き渡るその木の音にも足を止めず、扉を開けた湊は学生服のままベッドに横たわる人物の側に駆け寄った。

田に映る姿はまるで霧でも浴びたように体中に汗の水滴が光っている。

「北斗……！」

その声に横たわっていた人物は薄く目を開いた。

「兄さん……」

そっと出した手はぞくりと冷たく、それを兄と呼ばれた湊はたまらないように握りしめた。

「死ぬな……！ しつかりしろ！ 来月には移植に渡航するんだろう！？」

兄の必死な声に北斗は静かに笑んだ。

「その予定だつたけど……もうもたないかもね。生まれた時からボンコツの心臓だつたから」

その言葉に湊は目を歪ませた。

まさか、ここまで悪くなっていたなんて……！

弟の心臓が悪いことは知っていたし、移植しか治療法がないことも聞いていた。父も国内の移植では時間がかかりすぎると海外での手術を決意した矢先だったのだ。

でも、こんなに急変するほど悪くなっていたなんて知らなかつた……！

元々、弟とは母親が違うせいで普通の兄弟のよつては生活できなかつた。

同じ広い屋敷に住みながら、東と西に別れて住んでいたのだ。

それでも、小さい頃から外にあまり出られない弟のたつた一人の親友のつもりだった。

「しつかりしろ！ 今すぐ僕が渡航先の病院に連絡するから！」

しかし弟は荒い息でゆつくりと笑つた。

「無駄だよ。今すぐ渡航したって、体に合ひ提供者が見つかるまで待たないといけないのだから」「

間に合わない そう笑つ北斗の手を、湊はしつかりと掴んだ。

「諦めるな！ 絶対に何をしたって助けてやるから！」「

必死な兄の形相に、北斗は微かに苦笑したように微笑んだ。

「じゃあ、兄さん……お願いがあるんだ」

「何…？ 何でも言ひてくれ…！」

自分を見つめる兄の眼差しに、北斗にふわりと笑みが汗の中に浮かんだ。

「あのね……鬼の肝が欲しいんだ。伝説ではそれを食べたら、どんな病も治せるらしい。それが 欲しいんだ」

ぎゅっと北斗は湊の指を握んだ。

「京都の大江山に生き残りがいると言われている……ただの、伝説かもしれない……でもこのまま死ぬよりは、伝説でもいいから縋りたいんだよ」

死は嫌だ。

そう伝えてくる指を握り返し、湊は弟を見つめた。

「のまま死なせるべからざら……

「わかった！ 絶対に鬼の肝を手に入れてくる！ だから絶対に生きる！」

百万分の一の無謀な賭けでもやつてみよう そう握る手で伝えると、湊は弟を頼むと側にいた看護師に頭を下げ、部屋を飛び出していくのである。

「ああ

幽玄な月がその白い姿を雲間から現すにつれて、氷上はその美しい顔で溜め息をついた。

氷上の髪は月の光に、銀色に輝き、周りに真珠色の煌めきを投げかけている。肌は柔らかな透ける桜色で、唇だけがほのかに濃い紅を落としたよつて揺らめいていた。

伯父とよく似た金色の瞳が、鬼であることを表しているが、それは長い睫に憂鬱げに闇がされた。

「お！ 氷上！ いよいよ明日はお前の契り固めの日だろ？ 何しけた面してんだよ」

勢いよく背中を叩いてくる星川を氷上はじりりと睨みあげた。

「憂鬱にもなるぜ。まったく……じい様共が雁首並べて何事かと思つたら、どうか明日の祝宴では、伯父の茨木を選んでくれなんて！ 何で俺がオジキに抱かれないと云はねんだよ！？」

「ははは、やうこいつとか！ まあ、いい加減長老方もやきもしているからなあ」

憤る氷上をビリビリとあやすよつて、星川は氷上の小さな肩を叩いた。

「首領のオジキが独身で跡取りができるないからって、俺に押しつけんな！」

「鬼は女の数が圧倒的に少ないからな まあ、茨木の独身主義は

そのせいじやないが

笑いながら自分の背を叩く星川の逞しい姿を見上げ、氷上は悶絶した。

「よつてたかつて、みんなして俺に女になれって言いやがつて！
俺は誰より強い男の鬼になりたいんだー！」

頭を抱えて叫ぶ氷上の、銀の髪の間から覗く小さな白銀の角を見つめて、星川は苦笑をこぼした。

まあ、長老達の願いもわからんでもないけどな。

鬼は、その角が伸び始めたら、成人の準備を体が始める。

人の腹を借りて産まれた鬼の八割は生糀の男　そして純潔の鬼が子供から大人になる時、選ぶのも七割が男だ。圧倒的に女が少ない。

鬼は鬼同士で産まれた純血の鬼だけが両性で産まれ、成人するに従い性別を選べる。

角が伸び始めたら産まれた月の満月の夜に、契り固めの宴で、三年後の元服の日の添い臥しの相手を選ぶ。

添い臥しとは人間の世界でも古代には行われていたが、異性と一夜を共に過ごすことをいう。人間の世界では形骸化で单なる添い寝もあつたらしいが、鬼では違う。その夜、契り、精を交わすことによつて、一人前の妖となるのだ。

おそらくそれは神に仕える者が一生純潔を維持しなければならないのに対し、鬼は他人の精気を己の力として生きる妖しに属するからだらう。

けれども

星川は目の前の親友の妹の子供が、銀の髪を搔き回す様を面白そうに見つめた。

やっぱり男の方が強いから、みんな男になりたがるんだよなあ。鬼にとつては強さは誇りである。なんでなよなよとした背格好を選ぶ必要があるのかと、女性希望者は少ない。

まあ、人から産まれる鬼に男が多いせいで、確かに男社会だよな……

きっと女の鬼になれば、誰より美しいだらうこと惜しみながら、星川は氷上の細い肩を叩いた。

「じいさん達の言つことを気にするな。お前はお前の好きな方を選べばいい

「星川……」

じーんと氷上は見つめた。

「ありがとう。もてないのに競争率高くなるのを応援してくれるなんて……俺、お前を見直した

「俺は軽くお前を蹴りたくなった」

まつたくと星川は、黒い髪を揺らしながら、溜め息をついた。

「うひ見えて、それなりにモテるんだぞ。その証拠に」

ふつと星川は笑つた。

「天狗や妖狐、化け猫の知り合いに頼んで、明日一族の女の子に宴に参加してくれるように頼んでおいた」

「星川」

「男になるなら、明日は女を選ばないとダメだらうが？ 鬼に女は少ないからな」

「星川！」

ぱつと子供が喜ぶように氷上は星川に抱きついた。

「バカ！ 恥ずかしいから離れろ！ だけど明日口づけした相手で契りを交わす契約が結ばれるからな。くれぐれも慎重に選べよ」

「うふー！」

まだまだ子供っぽい素直さで返事をする氷上を、まるで弟のよつこ星川は愛おしげに頭を撫でた。

満月が山の木々を青く照らし、深い黒い影を地上に横たわらせる

夜、微かに響いてくる笛の音は漆はこつと體下に灯る明かりに笑みを浮かべた。

岩陰に立ち見下すと、下の少し開けた所に古い荒れ寺のようなのがあり、そこから楽しげな樂の音が響いてくる。

「エンガ」

小柄な姿で腕を組みながら、湊は明かりを見つめた。

「里の者に聞き回つて、言ひ伝えを調べた甲斐があった。まさか本当に満月の夜に鬼の酒盛りがあるとはな」

「こりぢは、満月の日に鬼が酒盛りの相手に娘を攫つと言われていて、その日だけは女の子は山に入ると言われましたなあ。猫を抱きながら寝かしあつて話してくれた、麓の集落の老女の顔を思い出した。

苗は山の荒れ寺で鬼の歌う声が聞こえたとか……満月の日に山に入るなんてくわばりくわばりと言つりましたわ。

「といひで」

後ろからかけられた声に湊は記憶から引き戻され、振り向いた。

「後ろでこほんと咳をしたのは、まだ西紀だった。にしき

「本当にその姿で行くつもりですか？」

「当たり前だろ？？」

母親を早くに亡くした自分の世話係をずっとしてくれていた穂やかな風貌の青年に、湊は少年らしくにっこりと笑った。

しかし着ている物は、撫子を描いた濃い紅色の浴衣である。

「神話の時代から、敵の懷に潜入して油断させるには、女装は常套手段！ 酒盛りの相手に娘を攫つほど女に飢えた奴らだ。みてろ、必ず見事誑かしてやる！」

「くれぐれも危ない」とはしないでくださいよ」

決めたらひかない湊の性格を熟知した西紀は溜め息をつきながら、こぼした。

「大丈夫、必ずうまくおびき出すから、お前は鬼がきたら頼むよ」

そう愛らしく少女の姿で、湊はにっこりと笑った。

明るい月の光の中に太鼓の音が冴え渡る。

バチを持ちながら踊っている鬼達の側で、狸が頭に木の葉を乗せて楽しげに横笛を吹き鳴らしている。

澄んだ大気に音が弾け、それに伴い楽しそうな笑い声があちこちから聞こえた。

「氷上ももつそんなに大きくなつたんだなあー」

「「」の前生まれて、ぴいぴい泣いていたと思ったのに」

男の鬼達は既に顔を赤らめ、大きな朱色のさかずきに注いだ酒を笑いながら飲み干している。

荒れ寺の縁側に座り、小さなさかずきで酒を飲んでいる氷上の隣には、首領茨木とその妹である氷上の母鬼が座り、その氷のような絶世の美貌に鬼達は見惚れていた。

ほかに女の鬼も幾人か集まり、座を盛り上げるのに神楽を踊つてくれていたが、どうにも氷上の表情は浮かない。

みんな人妻じゃないか！

考えてみれば、絶対的に少ないのでから、女鬼にはもう決まつた相手がいて当然だつた。

自分の伴侶が指名されたりしないようにと、眼光鋭く睨んでくるその夫の前で、いくら首領の血族でも添い臥しの相手に選ぶわけにもいかない。

それにみんなす」「く年上だ……

がつくりと氷上は肩を落とした。

そんな氷上の前に突然妖艶な美女が現れた。

「浮かぬ顔をしておるな。わらわを選んだら、一夜で男としての樂

しみの絶頂を極めさせてやる」「

九尾を鮮やかに金色に揺らしながら顎に手をやる妖狐の嫣然とした笑みに、氷上は思わず腰が逃げた。

「ん？ どうじゃ、帝さえとろかす妖狐の蜜の味を知りとつはないか？」

しかし氷上が言葉を発するより先に、横から薙刀が一人の顔の間に差し込まれた。

「黙れ、淫乱狐」

氷上がその声の方に目をやると、墨色の衣を修験者の如く着こなした怜俐な面差しの女性がいた。美しいが、鼻がひどく高く見えるのは氣のせいではない。

「お前などに鬼の首領の甥を任せられるか。氷上、私達天狗一族の女性を選ぶなら、お前に我らの山でみつちりと修行を積ませてやろう」

「どうちも御免だ！」

思わず氷上は心の中で叫んだ。

「俺にだつて、理想ぐらいある！ 初めてなんだから、同じ年ぐらいで、俺より小さくて……」

「妖怪はほとんどが百歳以上だよ。その中でも私たちは若いつちだよん」

「見た目だけな！」

まるで考えを読んだかのように今風の女子大生ぐらこの姿ですりよつてきた化け猫の女の子を氷上は思わず腕で防いだ。

「見た目若かつたら、いいでしょー？」

「最低五十歳以上揃いが何を言つ？」

見た目若くても、中身は喰わせ者揃いじゃないか！

「若い方じやん！」

きやはははと笑う化け猫の女の子達が「ロロロロ」と転がるのを見ながら、氷上は頭を抱えた。

もつとほかにいないのか……」「いや、小さくて守つてやりたくないような可憐な……

そうふと皿を上げた時、その姿が氷上の皿に映つた。

いた。

響く太鼓の音の向こうに、紅い浴衣に撫子の花を美しく描いた、大きな瞳の少女が目に入る。短い黒い髪を花の髪留めで飾り境内の端で不安そうに立つている。

元々小柄なのだろうが、筋骨逞しい鬼達の間では、その姿はひどく細く頼りなく見えた。背はおそらく氷上の肩ぐらいだらう。

初めてみるその子は愛らしい風貌で、ただじつと氷上を見つめていた。

「おい、お前」

氷上が声をかけようとした時、急にそれに気づいた星川が声を張り上げた。

「おい！ 人間の娘は連れてくるなと言つただろうが！」

それに側にいた小鬼が頭を下げた。

「すみません。山の中で道に迷つたと、さつき境内に入ってきたんです。すぐに追い払いますので」

「迷つたのなら仕方ないよな」

上機嫌で氷上はよつと腰を上げた。

「こんな暗い中歩かせて、崖から落ちたりでもしたら大変だ。明日の朝、俺が里まで送つていつてやる」

「おい、氷上 人間はダメだぞ」

慌てたように言つ星川の言葉も聞かず、氷上はもつと顔を見ようと近寄ろうとした。

その時、一人の男の鬼が近づいてきた。

「氷上　俺を選ばないか？　一生贅沢させてやるぜ」

お前、綺麗だもんなど笑う男の腹に氷上は咄嗟に拳を入れた。

「俺より弱い鬼に興味はない」

大人の鬼を一撃で悶絶させた、まだ小さな角を持つ鬼を見つめて湊は思わず心で呟いた。

なんか、むかつぐ。

月の光に髪は冴え冴えと眩く輝き、瞳はまるで金色の水晶だ。百合のように凜と夜の中に浮かび上がる姿は、人でない身であつても目を奪われる程に美しく、鬼なのに神々しくさえも見える。

僕なんて、背が低くて女顔だからさんざんからかわれてきたのに……

同じくらいの年格好なのに、世の中にはこんなにも美しくてカッコいい男がいるのかと思うと無性に腹がたつた。

「いつに決めた。

湊は静かに微笑んだ。

「いつの肝なら、確かに神通力がありそうだ……

産まれた時からぐぐにベットから出られない弟、身体測定の度にチビとかからかわれ身長順で一番前に並ばされた自分　神様はなんて不公平なんだろうと思う。

お前に決めた……

そんな湊の微笑など気づかず、氷上は怖がらせないよひと言え一つとと考えながら、その少女の姿の前に立つた。

「あー、腹へつてないか?」

山で迷つたのなら、お腹がすいてるかもと考えながら出した言葉に、湊は一瞬キョトンとした。

「なんか食うか? 鹿や猪の肉とか、木の実ならあるが……」

酒はまずいよな。

そう頭を捻りながら言葉を出す氷上に、一瞬呆気にとられたが、すぐに湊は怯えたふりをした。

「おなかは……すいていません。それよりも、怖くて……」

そう言つて肩を震わせる少女に、氷上は周りが妖怪だらけなのに気がついた。

「あー……、じゃあちよつと休めるとこで送つてくわ

「……じやあ、星川が邪魔しそうだしな。

一人きりになつて、なんとか添い臥しの役を引き受けってくれないか頼んでみようと氷上は考えた。

やひぱつ初めて抱くなり、じんな可愛こ子がいいよな……

「少女なら、三年後でもきっと可愛こだらつて氷上は田を細めた。」

「すみませ……」

そつ言つ少女の肩を怖がらせなこよひに抱くと、やつとみんなから守るみつに宴の場から離れた。

青白い月の光が木の梢から降り注ぐ山道を氷上と湊は連れたつて歩いた。

わあ、びうびう出したもんかな……

月の光のせいか、緊張のせいか、どこか青く強張つて見える少女の顔を下に見ながら、氷上は夏の虫の声がする山道を歩いた。

いきなり三年後、抱かせて下へこなによな……

それは変質者だと氷上が自答していくと、隣の少女が俯きながら小さな声をこぼしました。

「本当にすみません、私のせいで、宴を楽しまれていたのに……」

「なんだ、そんなことを気にしていたのか

明るく氷上は笑つた。

「そんなの気にしなくてもいいんだぜ?」

「優しいんですね」

「うう」と湊は笑つた。

本当に優しい鬼……

「では、それに甘えて一つお願ひしたいことがあります……が……」

「お、いこいぜ」

そうだー

閃いた考えに氷上はパッと顔を輝かせた。

「じゃあ、実は俺も頼みたいことがあるんだ。俺の願いを聞いてくれたら、何でもお前の願いを叶えてやる」

「本當ですね？」

「ああ、約束だー！」

すると湊はまるで詫問に甘えて縮るように、氷上の肩に抱きついた。

「私の願いを叶えてくれるなら、何でも言つてください

両手で湊は氷上の背中に手を伸みした。

そして袂に隠し持つていた短い刀を引き抜くと、すつと氷上の背中めがけて狙いを定めた。

「俺の願いは　」

どう言おうか悩んでいる氷上の美しい顔を見上げながら、湊は刀を握る手に力をこめた。

僕の願いは、お前の命だ！

ぎらりと刀に月の光が鈍く輝いた。

湊と氷上（後書き）

こちらでは初めての投稿です。

どうかよろしくお願いいたします。

感想など聞かせていただけますと、嬉しいです。

狙い来る者達

「俺の願いは……」

「あ、困った。

「いやとなればなんと言えばいいのかがわからず、氷上はそこまで腕を組んで考え込んでしまった。

その間にも、湊は笑いながら月光に振り上げた刀を銀の線を描きながら振り下ろす。

それが氷上の背に届き、着物に触れようとした寸前、それは弧を描いて方向を変えた。

「危ない！」

咄嗟に湊は横に氷上を突き飛ばしたが、氷上は何が起こったのかわからなかつた。

ただぐぐもるよつた悲鳴があがつたので地面に両手をついた状態で振り返ると、撫子の浴衣を着た少女が小太刀を抱え、その光る刃に深紅の血が糸のように絡んでいた。

その横に視線を動かすと、見たこともない鬼が盛り上がつた腕の筋肉を裂かれ、噴き出す血に呻き声をあげている。

一体ではない。二匹もの見知らぬ鬼が夜の闇の中に現れていた。

その中の腕を切られた鬼がぎろりと氷上を見つめた。

「お前達！ どこの者だ！？」

オジキの配下ではない。

氷上は睨みつけながら、頭を巡らせた。

ほかの鬼の一族が他の一族の根城に入つてくるなどただ事ではない。

けれども、腕を切られた鬼はそれを軽く舐めると、薄く笑った。

「俺らは紀の国の鬼だ」

ふんと、その鬼は氷上のまだ細い姿を舐め回すように見つめた。

「紀の国……？ 紀州の鬼がこの大江山に何の用事があるー？」

不法侵入ならば許さない。

そう眼差しで訴える氷上に、紀州の鬼達は着流しからもわかる見事な体躯を揺らしながら笑った。

「何の……？ 決まっているだろ？ あんた今日が契り固めの日らしいじゃないか」

びくりと氷上の指が動いた。

黒い長い髪の鬼が近づくと、冷たい顔で氷上の前に座り笑った。

「純血の鬼は数が少ないんだ ましてや、伴侶の決まっていない鬼はな」

まさか……

地面の木の葉を氷上が後ずさる微かな音が響いた。

「あんたは紀州に連れて行く。そしてうちの頭領のものになつても「ひづ」

頭領の下で女にされて、純血のより強い鬼の子を生涯産み続けるのさ。

そう耳元で囁かれた言葉に、氷上の顔が凍つた。

さらわれて、無理矢理女にされて……好きでもない鬼の子を一生……

いやだ、それは肩に触れようとするとその鬼の手に、凍えるような叫びとなつて氷上の心に響いた。

しかし突然の事に体中から血がひき、震えて身動きがとれない。

いやだ、いやだいやだ！

近づく鬼の手に顔中が蒼白になりながら、氷上はうまく言葉にならない唇を震わせた。

触るな！

必死に逃げようと顔を背けた氷上にその鬼の手が掴みかかろうとした瞬間、しかし突然呻いて止まつた。

驚いて見上げると、満月を背にした撫子の浴衣の少女が小太刀を振りかざし、相手の背中を切り裂いている。

「馬鹿！ 何をしている！ 早く逃げろ！」

僕の獲物を横取りされてたまるか！

話はよくわからなかつたが、とにかくあの鬼達がこの若い鬼を連れ去りに来たのはわかつた。それもおそらく無理矢理に。

顔を宴で見られた以上、もうほかの鬼を狙うのは無理だ。

「いっは譲れるか！

そう決意すると、湊は体が竦んでいた氷上の手をとつて無理矢理に暗い山道を走り出したのだ。

足の下で山道に積もつた枯れ葉ががさがさと音をたてる。

暗い道では木の葉に覆われた道を照らすのは、高い梢から降り注ぐ僅かな光だけで、地面から飛び出した根っこや横から無造作に伸びた木の枝などは見えない。

握った手が汗ばむのを感じながら、湊と氷上は暗い山の中を走り続けた。

後ろからは早い足で三体の鬼が高い身長を黒い影に変えて追いかけてくる。

ちらりと氷上は振り返った。

ダメだ、追いつかれる！

大人の鬼と子供の鬼ではやはり足の速さが違う。どんなに純血でも氷上はまだ子供だ。そして、前には人間の子供もいた。

普通ならば、とうに息が切れてる筈なのに、その少女は氷上の手を握つたまま走り続けている。

すぐに紀州の鬼達に追いつかれないのは、この少女が細い一人しか走れないような山道を選んだことと背の高い鬼では木の梢が邪魔しそうな道を選んでくれたお蔭だ。

だが足音や息遣いがすぐ近くにまで迫つているのを感じる。

「のままだと、この子まで……

「おじお前、手を離せー！」

氷上の叫びに怪訝そうに湊は振り向いた。

「のままじゃあお前まで巻き込まれる！お前はどこかに隠れて

逃げる！」

「嫌だね」

はつきりと湊は答えた。

誰が譲るか！

この鬼は僕のものだと、湊は握る手に力を込めた。

「お前……」

こんな状況下でも自分を見捨てないその少女に氷上は驚きながらも、握られた腕を見つめた。

「だ、だけど、お前まで連れて行かれるぞ！？ 鬼は女には飢えているんだ」

「大丈夫」

湊は叫ぶ氷上の手を強く握った。

「うつちー、端っこを走って！」

珍しい紅葉の大木の前を言われた通り道の端により、繁る下草にがさがさと音を鳴らしながら、足をとられないように走った。

シダや苔の生えた古木などが転がり、滑りそうになるが、そこの坂道を必死になつて下り降りる。

けれども下草のせいでわずかにスピードが落ちた。

「追いついたぞ！ おとなしく俺達の所へ来い！」

背後から迫り、肩を捕らえようと伸びてきた手に氷上の背筋が凍つた。

逃げられない！

いやだと叫びそうになつた時、突然湊が氷上の体を引き寄せた。氷上が湊の胸に倒れ込み触れた温もりに目を見開いたと同時に、鬼達の視界を塞ぐ程に地面の木の葉が舞い上がる。

「な、なんだ！？」

突然の頭に降りかかった枯れ葉の吹雪に驚いて振り返つた氷上の目に映つたのは、今自分を捕らえようとした黒髪の鬼が網に閉じこめられて高い木の枝に吊されている姿だった。

なんで獣を捕らえるのに使われる罠がこんなところ！……

枯れ草の下に網を敷き、獲物が踏めば、仕掛けが作動して網が自動的に獲物を捕らえる仕組みだ。

しかしここら辺りには今では人間はほとんど入つてこない筈だ。

氷上が瞬きをしている間にも、残つた一体の鬼が猛然と氷上に向かつて走つてくる。

「貴様、よくも！」

ましい！

掴みかからうと伸ばされた手に湊を連れて逃げようとしたが、湊は動かず僅かに唇の端をあげた。

その視線の前で追いかけてきていた銀杏の髪色の鬼達が急に地面に吸い込まれ消えた。

「え！？」

よく見ると、地面が突然陥没し大きな穴が暗く口を開けている。

落とし穴だ。

「なんでこんなとこひて落とし穴や罠が……」

呟く氷上の側で、湊は穴から這い上がりうつりする土をかく音に気がついた。

やはり竹串を敷き詰めておくべきだつたな。

時間切れでそこまでできなかつたが、落とし穴ではやはり鬼にはたいした効果はない。

唯一の取り柄はかなり深くて登るのに時間がかかることだらう。

一匹捕まえるだけなら、これでも何とかなるかもと思つたけれど……

やはり、安心はできない。

「わあ、今のうちに逃げよ！」

そう言つて湊は氷上の手を握つた。

「なあ、なんでお前が端つゝじよれと言つたと！」落とし穴や罠があるんだ？」

「細かいことは気にしない！」

「いや、すつゞく気になるんだけど…？」

そう言ひながらも、一人は鬼が登つてくる土の音にまた走り出した。

息を切らして走り、暗い山道から、急流が流れる川沿いの石場を二人は走っていた。

満月の白い月光が片側が切り立つた崖となつた道を照らし、下では月に波を光らせながら激しく流れる黒い水音が聞こえる。

もう片方には背の高い草が生い茂り、それが山の木の茂みからこの細い道の側まで続いている。

湊はもうかなり息が切れていた。

足がよろめき、後ろを追いかけてくる足音がまだしないことに気が緩み少しきよけた時だった。

「危ない！」

「どんと背を押されたと思うと、自分の肩の側を何か長い棒のような物が影となつて掠めていった。

慌てて振り返ると、横の草むらから長い金属の棒を持つた二人組が飛び出し、その月光に鈍く光る鉄パイプを自分達に向けてきている。

「人間……？」

アロハシャツに赤く染めた髪と剃り上げた頭、どうみてもまともな職業の人種には見えなかつたが、その姿形は間違いなく人間だつた。

「なんで人間が……？」

月光に照らされた姿に眉を寄せる湊に、氷上が小さく囁いた。

「知り合いか？」

「あいにく突然殴りかかる知り合いはない」

そんな声が聞こえたのかどうか、ヤクザ者と思われる男の一人が湊と氷上を眺めながら笑つた。

「兄貴、湊つてのはどっちのかわいこちゃんですかね？」

それにスキンヘッドの男は薄く笑つて鉄パイプを持ち直した。

「男の方らしこぞ。くれぐれも事故に見えたるよつゝやれとの」とだ

一人の視線が氷上に集まるのを感じた。

僕……？

しかしその氷上の横で湊は今の言葉に頭を殴られたよつた衝撃を感じていた。

狙われるよつた覚えはない。少なくとも殺される程の恨みを買つた記憶は。

しかし赤髪の男は今の言葉でさつと湊を隠した氷上を見つめながら、いやらしげに笑つた。

「兄貴、一緒の浴衣の女の子はどうしますか？」

「ふん、しようがない奴だ。後で口封じに遊んでいいから、好きなよつこしろ」

「了解

嬉しげに男は頷くと、軽く指で弾いた鉄パイプを湊だと思った氷上に振り下ろしてきた。

氷上の角は小さい。だから月の光の中では月光に輝く銀の髪と一緒にになってわからなかつたのだろう。

しかし身体能力は人間の比ではない。

鉄パイプを軽々と腕の筋肉で受け止めると、その金の瞳でぞんざくと男を睨みあげた。

「人間が　俺を殺せるとと思うか

そつ言つと、素早く鳩尾に拳を入れたのだ。

一瞬のことと、男は何が起つたかもわからず体を前屈みにさせた。

「！」の野郎！

横にいたスキンヘッドの男が腕の届かない位置から氷上に殴りかかる。

それを月光に真珠色に輝く腕で受け止めながら、氷上は薄く微笑んだ。

金の瞳が月影に冴えるように美しく輝く。

それに一瞬魅入られた男に氷上のしなやかな爪が伸びようとした時、しかし僅かに動いたことでできた隙から赤髪の男が湊の腕を引つ張つたのだ。

「貴様！」

「かわいこちゃんはアブナイから、後で俺が遊んであげるまで！」つちにあいでね

それが氷上の隙を生んだ。

一瞬振り返ったその間に、肩に鉄パイプを落とされる。

人間ならば肩が砕けただろうが、微かな眩暈ですんだのは鬼だからだろ？

けれども、その僅かな動きの隙を狙つて鉄パイプが氷上の細い体に連打される。

「やめろー！」

咄嗟に湊は無理矢理赤い髪の男の股を蹴り上げ逃げようとした。

しかしそれが男の怒りを買い、湊の体は気がついた時には突き飛ばされていた。

右足が、白い岩場に触れる。

そして左足が着いた所は、崖の境目だった。

ゆつくつと体が後ろに傾いていく。

夜の静寂にこだまする音にぶつかり流れる急流の音を聞きながら、湊は体がゆつくつとそこに落下していくのを感じていた。

落ちるー

けれども五メートル程の高さのそこから落としよつとした体は、突然岩場にぶら下がり止まつたのだ。

足の下には「ううう」と水が流れしていく。

「大丈夫か！？」

見上げた先には、小さな角を持つ銀色の鬼が必死に自分の腕を掴んでいる。

「君……」

思わず湊は、細いその姿を見上げていた。

ついさっきまで自分が命を狙っていた鬼が、今自分を助けてくれている。

こうして腕を掴んでいるせいだ反撃ができず、ただ打たれるのをまかせている体がその掌の振動から伝わりくる。

どうして……

狙われているのは自分ではないのに。

今手を離しても誰も彼を咎めないだろう。

打たれ続ける月光の中の姿を見上げていると、氷上の頭から紅い血が一筋流れるのが見えた。

「のままでは……

氷上は下を見下ろし尋ねた。

「おーー！ お前、そこから飛び込めるかー！？」

せめて俺を助けてくれたこいつだけでも……

そう思つて叫んだが、手の先で湊はその言葉にびくつと体を強ばせた。

氷上を見上げるその瞳の表情に氷上は気づいた。

「まさか、お前……」

泳げないのかー？

まるで泣きそうに懇願するかのように見上げる瞳に、氷上はきつて手を握り返した。

「いいか！ 絶対に俺の手を離すんじゃないぞー！」

けれどもその間にも氷上の体には痛烈な殴打が加えられていく。

逆らえず、身を守ることもできず、氷上の口から血が滲んだ。

ダメだ……

このままでは、一人ともこいつにせられてしまつと氷上は腕の先にぶら下がる湊を見つめ考えた。

それぐらいなら、いちかばちか……

ぐつと湊を握る手に力を込めると、崖に乗り出す姿にスキンヘッド

の男が慌てたよつて叫んだ。

「逃がすな！ 北斗様の話では泳ぎが得意だから、決して水辺に追い込むなことだ！」

北斗！？

心臓が悪くて、死の床をさまよつている筈の弟の名前が何故今ここにで出るのか

それが口から疑問になるより早く、崖から身を躍らせた氷上が湊を抱き込むと、夜の暗い急流の中に飛び込んだのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7717y/>

狙われた月影! 百鬼妖譚

2011年11月24日22時51分発行